

平成18年度

《第3回》

国語

時間50分，100点満点

受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入してください。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。記入方法を誤ると得点になりません。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも提出してください。

郁文館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今日を特徴づける一つとして、「活字離れ」ということが語られることが、いつか当然のようになりました。ア 数で言えば、かつてより活字の本はたくさん世に出ています。今日を特徴づけているのは、「活字離れ」ではありません。むしろ今日、読書という問題をめぐって揺らいでいるのは、本というものに対する考え方です。

本というのは「本という考え方」です。「考え」のヨウキや自己表現の道具にすぎないものが、本なのではありません。大切なのは、なによりもまず、本は「本という考え方」を表すものであるということ。本についてのいちばん重要なことは、本は「本という考え方」をつくってきたものであるということ。わたしはそう考えています。

本を読むということは、その内容や考えを検索し、イ ヨウヤクするというようなこととはちがいます。それは本によつて、本という一つの世界のつくり方を学ぶということです。

イ 遺跡。あちこちで古代の遺跡が発掘されています。ウ シュツドしたものには遺された文字をカイドクできれば、その社会の（a）、その時代に生きていた人たちの、世界の（a）がわかってきます。たった一つ、そこに言葉があれば、それだけで、そこにどのような社会が、ケイザイが成り立っていたか、その時代の世界の（a）、その社会の人びとの生き方が知られます。

ウ 料理。レシピという本を通して、料理の（a）を覚える。（a）を覚えるというのは、料理をつくる時間を手に入れることです。エ できたものを一緒に食べるという楽しみを手に入れるということです。そうした今を明るくし、食卓をひとの集う場所とする知恵が、料理の材料や調理法を次の世代に伝えてゆくレシピになる。

「本という考え方」を人びとのあいだにそだて、言葉をのこす「本の文化」というものをささえてきたのは、ここにある言葉を、ここにいないひとに手わたすことができるようにすることです。「読む本」「読むべき本」が、本のぜんぶなのではありません。本の大事なありようのもう一つは、じつは「読まない本」の大切さです。図書館が、一人一人にとつては、すべて読むことなど初めから不可能な条件のうえにたつてつくられるように、「本の文化」を深くしてきたものは、読まない本をどれだけでもついているかということです。

今日、見逃されがちなのは、「本の文化」のそのようなありようです。

読まない本、読んでいない本が大事なんだという本との付きあい方が、目先にでなく、どこまでも未来にむけられた考え方としての「本という考え方」を確かにしてきたということです。

本は「はじまり」「もと」という意味をもっています。「本という考え方」というのは、つまり「本」という本」ということです。本は本であるというの、言葉が本であるということです。その親しい感覚を通して、本はなくてはならないものとして感じられてきたということを、忘れないようにしたいのです。

本というメディアは、人間がもつとも長く付きあってきたメディアです。活字ができる以前から「本」はあった。口から耳へというかたちで、目には見えない「本」があった。人間だけにできて、人間にしかできない考え方が、「本という考え方」であり、「本という考え方」によつて、歴史のなかに成長してきたのが人間。そう思うのです。

その本を最後まで読んだことがない。にもかかわらず、その本を読んで、「私」という人間がすでにそこに読みぬかれていたというふうに感じる。のぞむべき本のあり方はそうであり、そのようなしかたで、いつの時代にあつても人びとにとつてのもつとも大事なことが、きまつて本というかたちをとつて表され、伝えられてきたというのは、宗教も、法律も、文学も、それが基本で、すなわち基本は本だからです。人間のありようにとつていちばん重要なことが書かれてきたのは、いつの世にも本だったから、三蔵法師（玄奘）も本（経典）を求めて西域に旅立ったのです。

いい本というのは、そのなかに「いい時間」があるような本です。読書といういなみがわたした

ちのあいだにのこしてきたもの、のこしているものは、本のもっているその「いい時間」の感^{かん}触^{しよく}です。本のある生活、本のある情景は、「こころにくい」という感^{かん}覚^{かく}がおたがいのあいだにたもたれるようでない^で、社会の体温が冷えてしまう。

今日、揺らいでいるのは、本のあり方^{ありかた}なのではありません。揺らいでいるのは、本というものに对^{たい}するわたしたちの考^{かん}え方^{かた}であり、「 a b 」が揺らぐとき、揺らぐのは、人と人を結び、時代と時代を結ぶものとしての、言葉のちからです。

※メディア：言葉を伝えるための手段や方法。
(長田弘『読書からはじまる』より)

問一 二重傍線部ア〜オのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ア〜エには、どのような言葉が当てはまりますか。次の記号より選んで答えなさい。

- ① あるいは ② しかし ③ そして ④ たとえば

問三 傍線部1「活字離れ」が問題だと筆者は考えていなくて、本当の問題は何だと述べていますか。その部分を問題文中より十五字以内で抜き出しなさい。

問四 (a) には、全て同じ言葉が入ります。その言葉を問題文中より抜き出しなさい。

問五 傍線部2『本の文化』のそのようなありよう」が指し示している部分を、問題文中より二十字前後で探して、始めの五字を抜き出して答えなさい。

問六 傍線部3「その親しい感^{かん}覚^{かく}」とは、どういう意味ですか。もっともふさわしいものを、次の記号より選んで答えなさい。

- ア 「読まない本」こそが大事だという本との付きあい方が、人間には必要だということ。
イ 本は「はじまり」「もと」という意味を持つのだと、人間だれでも知っているということ。
ウ 本は人間がもっとも長く付きあってきたメディアだということ。
エ 「言葉が本である」という感^{かん}覚^{かく}は、人間にとって基本的なものであるということ。

問七 傍線部5「その本を読んで、『私』という人間がすでにそこに読みぬかれていたというふう^{ふう}に感^{かん}じる。」のはなぜですか。その理由としてもっともふさわしいものを、次の記号より選^えびなさい。

- ア 本の世界の登場人物に「私」という人間を重ね合わせながら読むことができるから。
イ 人間にとってもっとも大事なことが、いつの時代にも本によって示されているから。
ウ 本を読んで豊かなイメージを感じ取れば、「私」と本の世界が身近に感じられるから。
エ 本を読んでいると「私」とそっくりな人間が登場する話と出会うことがあるから。

問八 傍線部4「目には見えない『本』」とは、例えばどういうものですか。次の記号より選^えびなさい。

- ア 手紙 イ 日記 ウ 音楽 エ 伝説 オ ラジオ

問九 傍線部6「三蔵法師(玄奘)も本(経典)を求めて西域に旅立った」とありますが、これをもとにして作られた話とは何ですか。次の記号より選んで答えなさい。

ア 秘密の花園 イ 三国志 ウ 西遊記 エ 蜘蛛の糸 オ 走れメロス

問十 傍線部7「こころにくい」の意味とは何ですか。ふさわしいものを次の記号より選びなさい。

ア 憎たらしいこと。 イ 気持ち悪いこと。 ウ みにくいこと。
エ 強く心をひきつけられること。

問十一 傍線部8「本のあり方」とは、具体的に言えばどういうことですか。それを示している四字の言葉を、問題文の書き出し部分から抜き出して答えなさい。

問十二 「b」にはどのような言葉が当てはまりますか。問題文中より七字で抜き出しなさい。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

始業のチャイムがなった。

黒沢は一人一人名前を呼びながら出席をとった。

「藤原さん。あれ、欠席じゃないんだね。えらいね、がんばれよ。」
にこりとしていった。あすかは顔が赤くなった。

「欠席は金沢さんだけだね。」

出席簿から顔を上げ、黒沢は教室を見回した。

「先生、金沢はもう来ません。追放することにクラス全員で決めましたから。」

大輔はいいながら、じつと黒沢の反応を見ている。

「追放？」

⑥ふふっと黒沢は笑った。信じられないとあすかは思った。

「あのねえ、先生はいつもいじめは悪いことだっていっているよね。クラス目標にもあるように、みんな仲良くしなきゃだめだよ。」

軽く「ヤサしくいった。黒沢の本心が、『表向き』の言葉にはないことをみんなはもう知っている。

大輔はとくに敏感に嗅ぎ取っている。

「おい、カナキンがきたぞ。」

窓側の席の男子が叫んだ。大輔と大輔の仲間たちが窓辺へと走った。

「追放令を出したのに来んじやねえよ。」

「ムカツクなあ。」

教室の開けた窓から仲間の一人が叫んだ。

「金沢、おまえ追放だぞ。帰れよ！」

大輔は後ろを振り返って黒沢の反応をうかがっている。騒ぎに気付かないふりをして、黒沢は黒板に算数の公式を板書している。

大輔は安心して窓辺にいる仲間たちに向かって号令をかけた。

「帰れ、帰れ、帰れ、帰れ。」

声をえてはやしたてる。

⑦順子は校庭に立ち尽くし教室の窓を見上げていた。サクラの花びらが、順子の頭上に降り落ちて

いる。

あすかは拳^{こぶし}を握りしめて立ち上がった。

「もう、止めなさいよ！」

みんなの視線があすかへ集中した。

「自分が何をしているかわかっているの！友達を傷つけるのって、そんなにおもしろいことなの！？」あすかは叫ぶと同時に教室を飛び出した。順子を迎えに校庭へと走る。

「待って、わたしも行く。」

後ろで晶がサケんでいたがあすかは構わずに走った。

校庭に順子のスカタはなかった。あすかは学校の外へ順子を探しに出た。交差点の信号のところ
でようやく順子に追いついた。

「藤原さん、すごい速いんだもん。苦しいよう。」

晶はハアハア息をきらしている。

「金沢さん、一緒に教室にもどろうよ。」

あすかがいった。振り返った順子の顔を見て、あすかははっと息をのんだ。表情のない暗い顔。生きる力が感じられなかった。声を無くした時のあすかと似ていた。

一人にはしておけない。誰かがそばにいないと。

あすかは不安になり緊張で震えた。

「金沢さん、早く戻ろう。」

晶が手を取ろうとすると、順子は振り切って走っていった。あすかと晶は順子の後を追う。

順子は歩道橋の真ん中で走りすぎる車を見ていたり、近くのビルの非常階段を登っていたりした。そのたびにあすかと晶は顔を見合わせ、そっと近づいて両側から順子の腕を取った。

歩き疲れて三人は小さな公園のベンチに座り込んだ。

「ああ、お腹空いたねえ。今日の給食、何だったっけな。」

晶は大きなため息をついていった。

「この公園、春の匂いがあるね。」

草の匂い。花の香り。あすかは目を閉じて大きく息を吸った。晶と順子もあすかに倣^{なま}って目を閉じて深呼吸をする。

「だめだ。目を閉じると給食が浮かんでくる。」

顔と名前に似ず晶はかなり現実的だ。大きな音を立ててあすかのお腹が鳴った。つづいて晶、順子と、お腹の虫がナキ出した。三人は顔を見合わせて声をあげて笑った。

自転車の急ブレーキの音がして、「あれーっ」という叫び声が聞こえた。

「やっとな見つけたよ。何やってんのこんなところで。」

三人の前に吉浦茂が現れた。茂は小柄でかわい顔をしている。確かあすかの前の席だった。

「みんな、大騒ぎで探しているんだよ。のんびりしている場合じゃないよ。」

笑い転げている三人を見て、茂は呆^{あま}れている。

「だってわたしたち、お腹が空いて動けないんだもの。助けてよ。」

苦しそうにお腹を抑えて晶はいった。

「わかった、待ってな。」

茂は急いで菓子パンとジュースを買ってきた。黙々と食べる三人を、茂は目を丸くして眺めてい
る。

陽が沈みかけて、辺りはほんのり暗くなった。西の空が茜色^{あかねいろ}にソまっている。

「わあ、きれいな空だねえ。」

あすかが叫んだ。

「夕焼けなんて見たの、なんか久しぶりだな。」

茂はいつてあすかのとなりに座った。かじりかけのパンを持ったまま、晶と順子も空を見上げた。

「わたしね、死のうと思っていたの。」

見上げたままで順子がいった。茂が「ひっ」と小さな悲鳴を上げた。

「わたし、ずっといじめられていたでしょ。教室にいるのすごく辛かったの。」
少し間を置き、順子は息を整えた。

「明日死のう、だから今日は我慢しようって、ずっと耐えていたの。」

とても悲しい話だとあすかは思った。順子の⑤肩にそつと手を置く。

「でもね、明日まで待てなくなつたの。だから今日、死んでしまおうって……。」

茂が⑥ぐくんと唾を飲み込んだ。晶とあすかは息をつめて聞いている。

「だけどね、わたし死ぬ方法が分からなかったの。どうやったら死ぬのか、探してみたけどわからなかったの。わたし、死ぬこともできないの。」

順子はいってぼろぼろと涙をこぼした。あすかは順子の⑥肩を抱く手にいつそう力を込めた。

「わからなくてよかつたわよ。」

晶の眼鏡の下から涙が流れてきていた。

「金沢さんは、どうして死ぬ方法を探そうとしたのかなあ。」

あすかがいった。

「わたしもね、すごく辛いことがあつたの。毎日泣いてばかりいて、死んじやいたって思つてた。」

⑦あすかは細いあごをついと上げて視線を空に向けた。

「その時ね、わたし、一生懸命生きていける方法を探したの。」

語尾が震え、⑧あすかの目尻には涙が一筋光っていた。

「それで、見つかったの？」

茂が訊く。⑨リスに似た丸い目を輝かせて。

「うん、田舎のじいちゃん畑でね。すごく時間がかかったけど、見つけたわ。」

「で、それはなんだった？」

今度は晶が訊いた。⑩眼鏡を細い人差し指で押し上げながら。

「答えはねえ、いろんなところに隠されていたの。土の中や木の上や、それから空にもね。虫も植物も土も風もぐるぐる輪になって生かし合っているでしょ。みんな、自然の恵みなんだって思ったの。ママの命も自然の恵みなら、わたしの命も自然の恵み。ぐるぐる輪になって生かし合っているんだなつて。」

あすかはにっこりと微笑んだ。

「僕の命も恵みなんだ。へえ、なんか面白い。」

「わたしの命も金沢さんの命も、自然の恵みね。うん、なるほど。大事にしようって思えてくるもんね。」

晶がうなずく。

「金沢さん。死ぬ方法より、幸せに生きていく方法を探そうよ、ねっ。」

あすかは順子の目を捉えていった。

「できるかなあ、わたしに。」

⑪順子の顔に弱い笑みが浮かんだ。

「きつとできるよ。私たちも応援するからね。」

晶とあすかは両側から順子の⑫肩を抱いた。強く温かく、心をこめて。

(青木和雄 吉富多美 『ハッピーバースデイ』より)

問一 二重傍線部1〜4までのカタカナを漢字に直しなさい。(ただし、楷書で丁寧に書くこと)

問二 傍線部①「ふふつと黒沢は笑った。」とありますが、この時の黒沢の気持ちを、生徒たちはどのように感じ取っているでしょうか。それを表現した一文を抜き出し、初めの五字で答えなさい。

問三 傍線部②「順子は校庭に立ち尽くし教室の窓を見上げていた」とありますが、この時の順子の気持ちにあてはまる記号をア～エの中から二つ選んで、記号で答えなさい。

ア 五里霧中 イ 臨機応変 ウ 茫然自失 エ 右往左往 オ 無我夢中

問四 傍線部③「あすかは不安になり緊張で震えた」とありますが、あすかがこのような気持ちになった、もつともふさわしい理由を次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 昔、自分が味わったような経験を、目の前の順子も味わっているから。
イ これから先、順子と仲良くやっていけるか心配になったから。
ウ 学校に帰ったら、先生に怒られてしまうと思ったから。
エ 晶に自分の弱い気持ちを見つけられてしまったから。

問五 傍線部④「目を丸くして」とは、茂のどのような気持ちか。ア～オの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 怒り イ 嘆き ウ 悲しさ エ 喜び オ 驚き

問六 傍線部⑤「茂がぐくと唾を飲み込んだ。晶とあすかは息をつめて聞いている」とありますが、この時の三人の気持ちと同じ思いを表している漢字二字の表現を文中から抜き出しなさい。

C-6

問七 傍線部⑥「肩にそつと手を置く」傍線部⑦「肩を抱く手にいっそう力を込めた」傍線部⑧「肩を抱いた、強く温かく、心を込めて」とありますが、あすかが順子の肩に置いた手の力が強くなったのはなぜですか。ア～エの中から適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア あすかは、自分をどうすることもできなくなってしまった順子に触れて昔の自分の辛かった気持ちを思い出したことで、皆で支え合い、この困難を乗り越えようと願いだめたから。
イ あすかは、自分でもどうすることもできなくなってしまったので、晶と順子に自分の弱い面を支えてもらい、これからの困難を助けてもらおうとしているから。
ウ 自分をどうすることもできない晶に、順子とあすかはこれから先に起こる学校での辛いことに対して、共に一生懸命乗り越えてゆくことを約束したかったから。
エ あすかは、辛いことに耐えかねて学校から飛び出した順子に何とか追いつくことができたことで、もうこれ以上走って逃げないで欲しいと思っているから。

問八 傍線部⑧「あすかは細いあごをついと上げて視線を空に向けた。」傍線部⑨「あすかの目尻には涙が一筋光っていた。」とありますが、この時あすかは何を思っていたのでしょうか。ア～エの中から一つ選びなさい。

ア 辛かった順子の気持ち。
イ 遠い祖父のいる田舎の風景。
ウ 学校の仲間たちのこと。
エ 悲しい自分の過去。

問九 傍線部⑩「リスに似た丸い目を輝かせて」傍線部⑪「眼鏡を細い人差し指で押し上げながら」とありますが、この時に茂と晶は、あすかにどのような気持ちを抱いていますか。次の中から適切なものを選んで記号で答えなさい。

- ア 早く教えて欲しいからだち。 イ 自分も知りたい期待感。
ウ 一緒に話ができる喜び。 エ 遠くを見つめる集中力。

問十 傍線部⑫「順子の顔に弱々しい笑みが浮かんだ」とありますが、「弱々しい笑み」とは順子のどのような様子を表していますか。

- ア これから明るくがんばろうと思ったが、やはり不安が残るために動き出せないでいる様子。
イ 明るく元気にふるまってきたが、辛いことを味わって、笑顔に元気がなくなっている様子。
ウ みんなと一緒にがんばろうと思っても、これから先の試験を思って、表情が暗くなる様子。
エ みんなと一緒にがんばれそうだと思ひ、心の緊張や不安が少しずつやわらいできた様子。